

〔書 評〕

滝澤武人著「福音書作家マルコの世界」

1995年12月25日 新教出版社

藤 間 繁 義

本書は、1995年度の桃山学院大学出版助成を受けて出版された書物である。著者滝澤は、1983年8月から12月までの間、エルサレムにある Saint George's College の The Bible and the Holy Land : Past and Present という10週間の研修コースに参加し、研修終了後、ガリラヤ湖畔を歩き回った。イエスが歩んだであろう道を、自分の足を運んで。その時ガイドブックとして携えたものは、ナインアン著「マルコ福音書」(ペンギンポケットブック, 1963) 1冊。(この本の著者デニス・エリック・ナインアンは、1994年度ウィリアムス主教基金講座の講師として日本聖公会の招請によって来日し、立教大学その他関西の大学神学部や神学校などで講演とセミナーを行った。)

著者滝澤は、福音書の記事や上記ナインアンの解説を手引きにイエスが歩んだであろう道を自分の足で歩み、行く先々でゆっくり時間をかけて風景や周辺の状況を観察しながら、イエスに思いを馳せ、再三イスラエルを訪問してガリラヤ湖畔を放浪し、「好きやねんイエス」と告白するほどにイエスにのめりこんで行った。長年にわたって抱き続けたそのような思いに駆られて取り組むことによって、従来の注解書とは一味異なる本書の出現をみたのである。

まず第一は、本書の書名が「福音書作家マルコの世界」であり、「マルコ福音書注解」とか「マルコ伝研究」と題し、テキストの章節の順を追って語

句説明や注解を加える既存のものとは全く異なっている。ところが本書の著者滝澤は、ガリラヤ湖畔での瞑想と徘徊放浪を通じて「好きやねんイエス」の思いを強く抱くに及んで、マルコ福音書を書き残した人物のイエスに対する愛情に感動するに至ったのである。本当に「好きやねんイエス」の気持ちをとことん表明しているのは、マルコ記者自身である、とさえ考える。

2000年近くの年月を経た古文書である福音書はマルコも含めて、学問的な手続きをふまえて読むことはなま易しいことではない。しかも様式批判や編集史的研究の進展が、日本でも田川建三を筆頭に、荒井猷、小河陽、川島貞雄、大貫隆、佐藤研、山口雅弘などのマルコ福音書研究者が、優れた業績を上げた。滝澤は、田川を中心に他の研究者の業績を吟味し、ギリシャ語テキストを自らの語り口調に合わせた邦訳でもって、イエスの心、—それは病に苦しみ悩む人や悲しむ死人の家族への涙と愛情とともに往く治癒や蘇生の奇跡の記事に窺われるイエスの人間的な心情—を歯切れよく語りかけるのである。

本書の構成は、「序章 著者問題」、「第一章 イエスに従う」、「第二章 ユダヤ教批判」、「第三章 弟子批判」、「第四章 ガリラヤの民衆」、「第五章 不定型の思想」、「第六章 人間主義」、「第七章 復活」、「終章 福音」となっており、われわれが普段手にする注解書やイエス伝とことなった各章の表題である。しかも各章ごとに「問題設定」と「まとめ」の項目を立てて、読者の思惟集中を誘う。

著者滝澤は、このような構成でもって独自の見解を構築し、大胆率直に自己の見解を問う。

「序章 著者問題」で滝澤武人は、マルコ福音書の成立年代と著者マルコの人物についての推論が定説化されて来た70年前後説に対して、50年前後説、40年後50年よりも前という説支持の立場に立つ。

いわゆる死海写本の発見にともなうクムラン写本、使徒言行録、他の福音

書の記録の検討の中から導き出されたオカラハン、ティーデ、田川建三など気鋭の研究者たちの50年前後という学説への傾倒。福音書中に散見する12弟子、殊にペテロに対する強い批判の言葉から著者マルコが、使徒言行録の伝えるヨハネ・マルコではないかとの考え。新約聖書神学の福音書研究にあたって、まず論ぜられる「著者問題」についての学者たちの見解とともに、門外漢のわれわれさえも興味を抱かせられる。

「第二章 イエスに従う」では、「マルコ福音書の中心メッセージが『イエスに従え』である。」との力強い喝破の言葉で始まる「問題設定」。『われに従え！』というイエス自身の呼びかけと求められる応答。この福音書中に19回もの多きにわたって頻出する「従う」という用語 ἀκολουθέω が、マルコ福音書の編集句として用いられており、マルコ福音全体を理解するキーワードであると指摘する。

次いでこの「イエスに従うか、否か」を思惟軸として、テキストに基づいた検討を展開する。

弟子たちの召命（1章16～20）、レビの召命（2章13～17）、ガリラヤから従う群衆（3章7～12）、ヤイロの娘の癒し（5章21～24、35～43）、故郷の村（6章1～5）、十字架を担う（8章34～38）、教会外の悪霊追放：逆らわない者は味方（9章36～41）、金持ちと財産の放棄（10章17～31）、第三の受難予告（10章32～34）、バルテマイの癒し（10章46～52）、エルサレム到着の物語（11章1～10）、過ぎ越の食事の準備（14章12～16）、一人の若者の逃亡（14章51）、大祭司邸の中庭のペテロ（14章53～72）、イエスの死を見守る女性たち（15章40～41）。

本書に取り組む滝澤武人の意図。人間イエスと彼を取り巻く人びとの人間性をさらけ出す事によって、われわれのあり方を問う。第一章のテーマ「われに従え」を軸としてマルコ福音書の記事を追うとき、そこには、イエスに信頼をおいて命令に従うひと、身近に親しく接しながら土壇場で親しかったことをも否定する人間。それは、洋の東西を問わず歴史を通じて見られたことであり、われわれの社会でも日常見受けられる。一方は誠実なひととして

名誉の冠を受け、他方は裏切り者、反逆者と罵られることになる。

マルコ福音書の記事をテーマを軸として拾い綴りながら、独自の読みと解釈を展開する方式は、第二章以下「第七章 復活」まで続く。

「復活」をテーマとするこの章では、「復活物語以外のテキストの検討」から取りかかる。マルコ福音書の記事を順を追いながら、復活に関する記事や字句を渉猟して、著者マルコが編集の意図をもってそこここに配置している語句や物語を抽出してマルコの真意を探ろうとする。

まず「洗礼者ヨハネのよみがえり」（6章14～16，8章27～28），受難・復活予告（8章31，9章31，10章34），山上の変貌の後の会話（9章9～13），「サドカイ派との復活論争」（12章18～28），「受難物語」（14～15章）と「復活物語」（16章），とテキストに基づいて検討した後，「マルコの編集作業」，「ガリラヤの女性たち」，「『空虚な墓』のメッセージ」，「弟子批判」。「女性たちの沈黙」という設定で普通には信じ難いイエスの「復活」についての証言を確かめて行く。

「復活」こそは人間イエスをキリストと告白する信仰の根幹である。そして，マルコはイエスの復活を信じ，ことさらにそれを強調している。そしてガリラヤの女たちに，「ガリラヤへ！」との方向をさし示し，「イエスを見るであろう」との可能性のままにとどめるとともに，全ての福音書読者に「イエスがよみがえった！」と高らかに証言するのである。

「終章 福音」では，マルコが福音書冒頭に記している「イエス・キリストの福音」を巡る田川建三と荒井猷の相異なる見解を紹介することから始まる。「キリスト」の語には定冠詞が付されておらず，この語がいわゆるメシアのギリシア語として用いられているのではなく，「イエスにつけられた単なる固有名詞」と考える田川建三。「キリスト」を明らかにイエスのキリスト論的称号とみなしているマタイ，ルカ，パウロ書簡の如く，「冠詞の有無によってこのような判断を下すことは不可能である，とする荒井猷。そして著者滝澤は，定冠詞の有無にこだわり続け，イエスが神の国の福音を宣教す

る姿にこだわりつづける。つまり著者マルコは、そのようなイエスを通して神の国の福音宣教を意図しているように思われる。

「あとがき」における、キリスト教に関する諸施設、諸機関がキリスト教の枠にとらわれないで、「福音」の道をめざすさまざまな試みが、自由に、大胆に行われるべきである、という滝澤の主張は、現在の教会、学校など多くのキリスト教諸機関に対する真摯な提言である。

モタモタしたこの紹介文よりも、著者滝澤の歯切れ良い江戸っ子調の文章は、遙に説得力に富んでいる。滝澤が、力をこめて語る人間臭い素顔のイエスは、われわれ現代人に呼びかけるもの、われわれが求め、かつ、実行にうつすべきものを示すように思われる。

聖書テキスト（日本語訳でも可）を繙きながら、福音書作家マルコがノンフィクションのように描くイエスの歩みに沿って読むことによって、読者が目から鱗の落ちる思いを抱くに違いないとの確信をもって推薦する次第である。